

とうきょうすくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1205
施設名	狛江ちとせ保育園
施設所在地	狛江市東和泉1-35-10
法人名	社会福祉法人ちとせ交友会

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

「自然」

〈テーマの設定理由〉

昨年度、「自然」をテーマにした活動の中で、絶滅危惧種のトンボの存在を知り、「守りたい」という思いをもつ姿が見られ、その関心が継続して育まれている様子があった。また、近隣には多摩川があり、自然に触れたり調べたりする機会に恵まれている。こうした狛江市の自然豊かな環境を生かしながら、子どもたちの自然への興味・関心や探究心をさらに深めていきたいと考え、本テーマを設定した。

2. 活動のスケジュール

- 5月 子どもたちが自然に親しめる環境づくりとして、ビオトープ工事を実施した。工事の様子を見たり、完成後に水辺へ関心をもったりする姿が見られた。
- 6～8月 季節の花や草木に触れながら、園庭やビオトープ周辺で自然観察を行った。園庭ではオクラなどの夏野菜を栽培し、水やりや生長観察、収穫を通して植物への興味を深めた。また、水辺の生き物や虫などを見つけ、子どもたちの興味関心に応じて観察や飼育へ活動を広げた。
- 9～11月 ビオトープの変化や園庭の実のなる木の実りの変化から季節の移り変わりに気付き、生き物の様子や果実について継続して観察した。図鑑を見たり友達同士で発見を共有したりしながら、探究活動を楽しんだ。また、収穫した実や野菜に触れたり味わったりする中で、自然の恵みへの関心を深めた。
- 12～2月 水辺・水中の生き物への関心が深まり、子どもたちの「もっと見たい」「触れてみたい」という思いをもとに活動内容を展開した。移動水族館を実施し、実際の水辺・水中の生き物を見たり触れたりする体験を行った。生き物の特徴や動きに興味をもち、発見や驚きを友達や保育者と共有した。

年間を通して、子どもたちの興味関心や気付きに応じて、自然物や生き物に繰り返し触れられる環境を整え、継続的な探究活動につなげた。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

園庭にビオトープを作り、メダカや沼エビを放し、水草を入れることで、身近な水辺の生き物を観察したり自然環境に興味をむく環境設定をする。移動水族館の体験により水の中の様々な生き物に興味をもち、実際に触ってみるなど近くでみる体験を通してより関心を深め、その後の表現活動ができるよう素材を用意する。絵本・図鑑・写真・土・植物の種・肥料・じょうろ・虫かご・スコップ・画用紙・模造紙・廃材・虫眼鏡・タブレット・皆で共有したり調べたりするための電子黒板等デジタル教材等。

4. 探索活動の実践 ～別紙参照～

水辺・水中の生き物・生き物・草花・畑

5. 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

園庭のビオトープやめだかの飼育、移動水族館などの水辺・水中の生き物との関わりを通して、子どもたちは自然物に触れながら興味関心を広げていた。実際に見たり触れたりする中で、「かたい」「やわらかい」など感触を言葉にし、五感を通した学びにつながっていた。また、図鑑や写真、電子黒板等で調べた経験と実体験が結びつくことで理解が深まり、「これは触って大丈夫かな」と自ら確認しながら関わる姿も見られた。

畑での野菜栽培では、図鑑や保護者から得た情報を友達と共有しながら主体的に活動に取り組んでいた。種から育てたことで発芽や成長に時間がかかり、オクラやアサガオの成長の違いに気づきながら観察を楽しむ姿が見られた。また、水やりのしすぎや日当たり不足でうまく育たない経験を通して、植物の育成には適切な環境や世話が必要であることを学んでいた。さらに、大きく育ちすぎた野菜から自然の変化を知り、食べられなかった野菜もスタンプ遊びに活用するなど、経験を遊びへとつなげていた。

果実に関する活動では、落ちたみかんを使ってジュース作りに挑戦し、「どうしたらジュースになるのか」と試行錯誤する姿が見られた。収穫活動では、友達と協力しながら果実を収穫し、皮をむいたり絞ったりしながら方法を考えて取り組んでいた。自分たちで収穫した果実を使ったゼリー作りでは、達成感や満足感を味わい、食材の変化の不思議さや協力して作り上げる喜びを感じる経験となった。

草花の活動では、散歩先での発見をきっかけに花や虫への関心が高まり、自然への興味を広げる姿が見られた。実物を使った製作や感触遊びでは、自然物への理解を深め、自分の感じたことを自由に表現していた。また、栽培活動やおむしとの関わりを通して、植物や命の変化に気づき、愛着をもつ姿が見られた。

生き物の活動では、虫探しや図鑑の活用を通して、子どもたちの探究心を育む環境を整えた。見つけた虫と図鑑を照らし合わせながら理解を深めたり、保育者と共に調べたりすることで、「もっと知りたい」という意欲につながっていた。また、興味をもった生き物を製作や集団遊びへと発展させ、表現活動としても広がりを見せていた。

これらの活動全体を通して、子どもたちは自然物に対して五感を働かせながら主体的に関わり、興味や疑問を出発点として探究を深めていく姿が見られた。実体験と事前の調べ活動、表現活動が循環することで、学びが一過性ではなく継続的なものとなり、自然への親しみや命への尊重の気持ちが育まれていった。また、成功体験だけでなく、思うように育たなかった経験や試行錯誤する過程も、子どもたちにとって大切な学びとなっていた。今後も、子ども一人ひとりの気づきや発見を丁寧に受け止めながら、図鑑やICT機器なども活用し、自然との関わりがより広がり深まる環境を継続して整えていきたい。